

参加報告「関西国際大学 教育 GP 公開フォーラム」 ー初年次サービスラーニングの取組ー

開催日時：2009年9月18日 13:00～17:30

開催場所：関西国際大学 尼崎キャンパス

報告者：教職大学院 宮崎 猛

I 概要

0 濱名篤学長よりの挨拶

1998年設立の新設大学。このため多様な学生が入学。初年時教育の重要性が設立時より指摘されており、様々な取組を進めてきた。その結果、学内での友人づくりが上手になったが、学生は学校内に留まり、社会に出て行かない状況が見受けられた。そこで、サービス・ラーニング（以下 SL）に着目し、社会貢献的活動を教育プログラムに取り入れ、社会とのかかわりをもたせるとともに、大学設立の理念の実現に寄与する学生を育成することにした。

1 基調講演 「アメリカにおけるサービス・ラーニングとジェネリックスキル向上のための教育効果について」

講演者 Jennie Kim-Han (California State Univ. Fulerton 以下 CSU

Director in Center for Internship & community Engagement)

内容)

- ・ CSU=約 50年の歴史があり、全学で約 40万人、Fulerton校には3万5千人が在学。
- ・ SLの歴史、SLの意義、SLの概要（別紙 講演資料スライド参照）
- ・ CSUのSLの特質すべき点：
 - ・ 「サービスセンターコース」「PBLコース」「サービスインターンシップ」「コミュニティベースリサーチコース」「キャプストーンコース」などのコースを設定していること。
 - ・ 教育効果を評価できるSLの実践の条件を明らかにしていること。例えば、SLの活動（サービス）は単位として認定しないが、活動の振り返り（ラーニング）のみを評価するなどの実施形態。
 - ・ SL行った学生は就職難の状況下にあって、良好な成果を収めていること。
 - ・ SLを取り入れて約20年経つが、現在では、コミュニティの受け入れ先が、洗練され、教育的な役割を担うようになったこと。

2 パネルディスカッション 「サービス・ラーニングがもつ教育効果」

コメンテーター：川嶋太津夫（神戸大学 大学教育推進機構）

パネリスト（実践事例報告）：

- ・ Dr. Jenniefer Ponder（California State Univ. Fulerton Assistant Professor）
- ・ Jennie Kim-Han（上掲）
- ・ 武田直樹（筑波学院大学 OCP）

①関西国際大学の取り組み

- ・SLを初年時教育に取り入れるための取り組みが、平成20年のGPに採用。
- ・学習ベンチマークを作成するとともにそれに呼応する形で、SLを導入。導入の理由は、大学のユニバーサル化における有効な方策と考えられることとSLは社会貢献できる人間、問題解決能力を身につけた人間を育成するために有効な教育方法と位置づけられること。GPでは特に系統的・重層的に学年進行でSLを積み上げていくカリキュラムを編成し、大学1年で必修化。最終的には教員のペタゴジー改革につなげることができるのではないかと期待された。現状では1年次教育が何とか実施できている（効果をあげている）状況で、重層化については課題がある。
- ・SLの実践事例として海外でのSLが紹介される。カンボジアの貧困等で学校に通えない子どもに九九を教えるというプロジェクト。九九を教えるだけでなく、使用教材を寄付するための募金活動なども行う。
- ・ルーブリックをつくり、学生の学びを評価。これによってさらに学ぶべきことが見えてくる。今後の課題としてはそれを大学の学びにどのようにつなげていくかにある。

②Dr. Jenniefer Ponder 氏の実践

- ・教師教育にSLを導入。
- ・現職教員に社会科教育、市民教育の立場から現職教員学生に対するSL導入・実施メソッドを開発。
- ・取り組んだ現職学生の多くがその意義を感得したが、一部は、学校（校長）の協力を得られず思うように実践できなかった学生もいた。
- ・対象となった児童・生徒のみならずSLに取り組んだ教員にも、自己肯定感や市民性（社会の担い手の役割の自覚）が身についた。

③筑波学院大学の取り組み

- ・筑波学院大学は、全学学生800人程度であり、ほとんどが地元から通い、地元で就職する。3年間SLを社会力育成の観点から必修化が大きな特徴。
- ・多様な学生（意欲がなくモラトリアムで大学に来る学生など）が、存在。前学長の門脇厚氏が「社会力」を提唱したことが契機で、そのコンセプトを実現するためにSLを導入。
- ・専任職員として社会力コーディネータ（SL担当）を採用。
- ・プログラムは、コーディネータ主導のプログラム、教員主導のプログラムがあり、100の受け入れ団体の中から一つ選択をして、現在700名の学生が社会参加活動を実践中。
- ・これまでの成果として、地域の受け入れ団体の多くがオーナーシップをもつようになった。活動団体からの評価も平均で4ポイント以上。学生も実施当初は学長に不満を申し出るものもいたが、活動が始まると多くが評価。8割の学生が効果を感得。卒論、就職、進学にまでつながっている学生（大学院進学）も少なくない。

II 感想

従前より社会貢献への志向が強く、多様な形でのボランティア活動の盛んな本学においては、学術的な学びを社会貢献に活かし、その過程でさらに学びを深め、学びの意義や意味を感得するというSLは有効な教育方法になるものと考えられる。そこにおいては、関西国際大学や国際基督教大学などの先行校の実践事例は大いに資するものである。